

【実践報告】

学修ポートフォリオの現状と課題

溝 渚

Current Status and Problem of Learning Portfolio

Jun Mizobuchi

1. これまでの経緯

2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、卒業認定の評価の厳格化が大きな課題であるとされ、「評価の厳格化は、卒業時だけの問題ではなく、入学してからの教育指導の過程における成績評価についても、学生の成長という観点から考えなければならない」という現状認識と課題が示された。その上で、「評価に当たっては、多様な活動の成果を評価する観点から、学生の学修履歴等の記録と自己管理のためのシステムを開発することは、学習成果を重視した評価の条件整備として重要である」と改革の方向が示され、その具体的な改善方策の一つとして、「学生が、自らの学習成果の達成状況について整理・点検するとともに、これを大学が活用し、多面的に評価する仕組み（いわゆる学習ポートフォリオ）の導入と活用を検討する」ことが挙げられた^{※1)}。

その後、2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において、学修の成果を評価する際の材料として、学修時間の把握といった学修行動調査やアセスメント・テスト（学修到達度調査など）、ルーブリックなどとともに、学修ポートフォリオが示されている。その後、2017年度までの「大学改革実行プラン」の中でも、教育の質的転換に向けた改革方策の実現に向けて大学が取り組んで行くことが求められている。

広島文教大学（以下「本学」）では、学修ポートフォリオに関しては、「ユニバーサルパスポート」上に「マイステップ」という機能を追加させる形で、2014年度より学生による活用が可能となっている。当時学生に配布された資料には、「皆さんがこれまで学んできた内容や学生生活での取り組みをふりかえったり、現在の自分の状況を書き留めたり、記録したりするものです」、「記録した内容は教員も参照でき、コメントすることができます」といった機能の説明がなされている。その上で「自分自身の学びや成長をふりかえり、次の成長に向けて計画を立て、実行する→学びや生活の自律・自己管理を実現します」、「就職活動の際、これまでの大学での学びや取り組みをふりかえり、履歴書作成や面接対策の際に活用できます」、「チューターをはじめとする、教職員との連絡・連携を密なものにすることができます」、さらには、「チューターとの面接の際に活用することができるようになっていきます」と活用の目的が示されている。最後に「大学生として、自らがどのような学びや活動をしてきたのかを記録し、目に見える形で遺しておくことはとても重要です。また、記録をふりかえることで自らの良い点やウィークポイントなどを発見し、今後の学びに繋がるヒントを得て、学びや活動の計画を立てる上で役立てることができます。また、入力した情報については、チューターを初めとする教員と共有され

ますので、適切なタイミングで適切な指導が受けられます」, 「くり返し取り組み, 記録を積み重ねていくことで, 大学生に求められる『自ら学ぶ力』, 『自己管理能力』の向上を図ることができます。これらの力は, 就職活動や卒業後に仕事に就いた際に必ず求められることとなります」ということで, 活用の効果が示されている。このような学生への説明は冒頭に挙げた各「答申」の内容を意識して作成されている。

マイステップに記入する具体的な内容としては, ①興味のあること: 現在の興味について, ②学びのふりかえり: 成績など, 自分自身の学びをふりかえり記録する, ③マイゴール: その時点での自らの目標を確認し, 計画を立てる, ④マイスキル: 自分自身が今, どのような知識や技術を身につけているかを確認する, ⑤まとめ: 全体的な印象やふりかえり, 今後の課題などを記入するといったものである。加えて, ⑥大学入学までの学びの自己評価: 1年生前期のみ記入。高校時代までの学びの振り返りを行うものが付け加えられている。この⑥については, 高大接続を意識した項目である。学生向けの説明資料の最後には下図のような活用イメージが示されている。

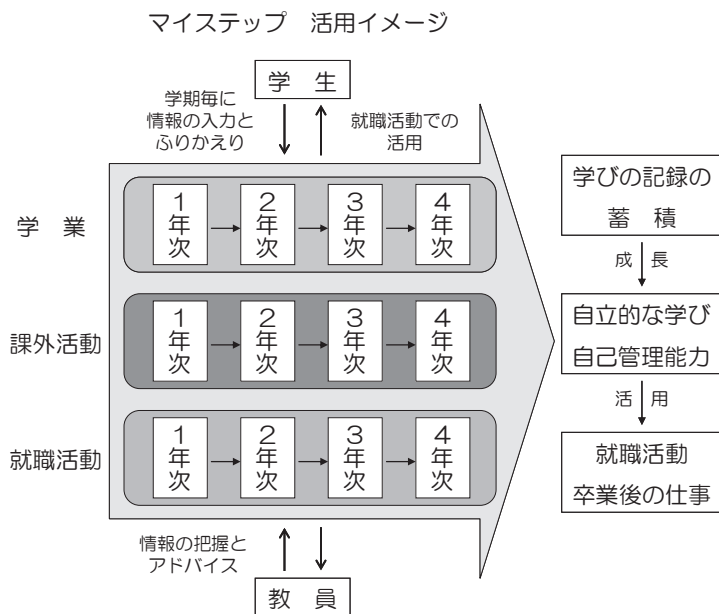


図1 マイステップ 活用イメージ (2014)

筆者は当時の導入に際し, 本学において入学前学習やリメディアル教育等の実務を担当する部署であるところの, 「学習支援室」の運営委員として携わった。当時は本学における学生と教職員との間の距離の近さに裏付けられた, 「面倒見の良さ」をより充実させ, 具現化するための補助的なツールとして, かつ, 学生に負担を感じさせないようにとの配慮から, 必要最小限の内容に絞る形で設計した。また, 活用の目的に見られるように, 記入された内容を通して, 学生と教職員の対話が促進されることを想定していた。そのため, 記入内容も比較的漠然とした, 自由記述によるものを中心としていた。

しかしながら「学生に負担を感じさせないように」との配慮をはるかに上回る形で, 本学における学生の主体的な「マイステップ」活用の頻度は極めて低い状況にある。公益社団法人私

立大学情報教育協会大学情報システム研究委員会が作成した資料、「学修ポートフォリオシステムの導入・活用等の参考指針」(2017)においても、学修ポートフォリオ導入の現状として、「その目的や意義について、十分に学生・教職員の理解が得られていないこともあり、期待した以上には教育改善の成果がみられていない」とされている。また、主な問題点として、学生や教職員、組織全体において、ポートフォリオの意義・目的及びメリットが理解されていないことや、継続的な活用をするための意欲・資源の不足などが挙げられている^{※2)}。このような問題点は本学においても当てはまる。そこで本資料では、本学における学修ポートフォリオ活用への課題と今後の展望について、本学の現状を交えながら簡潔に述べる。

2. 状況の変化

前掲「学修ポートフォリオシステムの導入・活用等の参考指針」(2017)では、学修ポートフォリオに関する基本的な考え方として、「学修者中心の学修ポートフォリオ」と「教員・大学からみた学修ポートフォリオ」を挙げている。「学修者中心の学修ポートフォリオ」とは、「学生自身が学びのプロセスや成果を示す資料・コンテンツ等を継続的に蓄積したものである。学生は、継続的かつ定期的に学びを振り返ることを通じて学修の到達度を確認し、取り組むべき課題を発見することができる。また、教員から個別指導を受けることで適切な学修支援を獲得して学びを深化させ、さまざまな知識と技能を自主的に修得することができる。このような学修の体験を繰り返すことで、生涯に亘り身につけるべきキャリア「能力」を形成することができる」とされる。一方「教員・大学からみた学修ポートフォリオ」は、「学びと教育のプロセスを『見える化』し、そのプロセスを学生と共有することができ、学生の学修行動を把握できる。教員は、学修行動の記録を活用して授業の点検・評価を行うことで、課題を発見するツールとして活用できる。また、大学では教育プログラムの効果を明確化し、教学マネジメントを点検するIR(大学機関調査)ツールとして多面的に活用できる」とされる^{※3)}。

前述した問題点の一つ、「目的や意義について、十分に学生・教職員の理解が得られていない」ことについては、学修ポートフォリオのもつ特性への理解が不十分であることがその原因であると考えられる。特に2008年度の「答申」においては、「学士力」が強調され、「自律的な学修者」、すなわち、自分で考え、自分の責任で判断し、行動できる者、そして、自ら学ぶ姿勢を身につけ、生涯にわたって進んで学修できる能力を持った者の育成に力点が置かれていた。そこで、学修ポートフォリオを活用する際にも、「学修者中心の学修ポートフォリオ」としての特性がより強調される形となったのではないだろうか。

このことに関連する変化として、教育職員免許法施行規則の改正に伴い、2010年度入学生から教職課程の必修科目として「教職実践演習」が設けられ、その履修のために「教職履修カルテ」の作成が必須となったことが挙げられる。「教職実践演習」は、教員として最小限必要な資質・能力を確実に身に付け、またそのことを確認する科目である。その中で、「教職履修カルテ」は、学生が主体的に授業担当者の所見を参照したり、定期的に自己評価や活動履歴を入力したりする仕様となっており、教員を目指す学生にとっての、「学修者中心の学修ポートフォリオ」としての側面が強いものであった。本学の「マイステップ」もまた、このような「学修者中心の学修ポートフォリオ」のイメージを踏襲する形で導入されたものであった。

しかし実際のところは、2008年度の「答申」においてできえ、ポートフォリオはあくまでも「評価の厳格化」に関連付けて提示されたものであった。つまり、「教員・大学からみた学修ポートフォリオ」としての特性の文脈において取り上げられていたのである。その後、2012年の「答

申」以降は、「教員・大学からみた学修ポートフォリオ」としての特性に、より力点が置かれるようになっている。「教職履修カルテ」との兼ね合いも含め、上記の学修ポートフォリオの2つの特性を区別した上で、学生や教職員への理解の促進を怠ったことが、本学において学修ポートフォリオの活用が少ないことの一つと考えられる。このことへの反省に立ち、これまでの「学修者中心の学修ポートフォリオ」の特性を残しつつ、「教員・大学からみた学修ポートフォリオ」の特性をも有した学修ポートフォリオの確立と運用が本学にも求められる。

3. 今後に向けて

以下では、今後本学の学修ポートフォリオをどのように確立していくのかについて、若干のアイデアや、それらを実現する上でクリアしなければならない課題について述べる。

① IR ツールとしての活用を見越し、統計的な処理を行うことができる内容を盛り込む必要があること

本学では「学修行動調査」を実施しているが、学生による学修ポートフォリオの活用が常態化することで、学修行動調査を用いて収集しているデータの一部を、日常的に蓄積・活用することができる。例えば1日の平均学修時間などについては、すでに学修ポートフォリオの入力項目としている大学が存在している^{*4)}。

さらに本学では2016年度より3ポリシーを明示している。特にディプロマ・ポリシーについては、大学教育全体の到達目標でもあり、学部・学科毎のディプロマ・ポリシーにもその内容が色濃く反映されている。また、各科目のシラバスに、当該科目での学修の結果、ディプロマ・ポリシーのどの能力の修得が実現されるのかが明示されている。学生と教職員が学修の到達目標とその具体的な内容について共通の理解を有している状況において、例えば学修ポートフォリオ内に「ディプロマ・ポリシーの達成度に関する自己評価」等の項目を加えることが可能となる。

これらを実現する上で懸念されることの 하나가、教学システムに関するものである。本学では複数のシステムが併用され、それぞれが履修登録や出欠管理などを担っているため、情報を統合することに困難が生じやすい。例えば学生が学修ポートフォリオ内で自らの学修について自己評価する場面を想定してみよう。その際、授業の出席状況等を参照したいと思っても、システム間の連携が難しい場合、それらの情報を即座に参照できなくなってしまう。自己評価をする上で、その判断材料となるような、大学から提供される情報の充実とそれを実現する教学システムの統合化は、今後の大きな課題といえよう。

もう一つの課題が、学生と教職員における共通理解の促進である。ディプロマ・ポリシーそのものについては共通の理解がなされていても、その達成度合いがどの程度のものであるのかについての基準が明確でなければ、学生自身の恣意的な評価に終始してしまう可能性がある。したがって、ディプロマ・ポリシーに関するルーブリック（マイルストーンとなる項目）等を策定し、その内容について学生と教職員が共通の理解をもつことにより、学生が自己評価を容易に行い、教職員が適切なアドバイスをを行うことが可能となる。

②活用啓発の徹底と、担当する組織を明確にすること

先述した「教職履修カルテ」への記入に関しても同様であると思われるが、学修ポートフォリオを活用するにあたっては、その意識づけが難しい。システム構築はもちろんのこと、それらを活用していくにあたっての全学的な啓発活動の展開も重要であり、チューターによる面談

や、本学で学生が自学自修の態度を修得するための時間として毎週水曜日に設定されている「育心の時間」の活用など、学生に意識づけ、定着させていく方策を練る必要がある。また、学修ポートフォリオは、IRのための量的なデータだけではなく、就職に関する内容や課外活動への取り組み状況、日々の学修の取り組みに関して、極めて個人的な質的データが蓄積されていく可能性を有している。それらのデータの管理はもちろん、閲覧の権限を誰に、どこまで与えるのかなど、緻密な検討を要する課題が多く存在している。また、その運用を複数の部署で担当することが、情報漏洩のリスクを高めることになる点についても注意が必要である。

周知の通り、すでに文部科学省が主導して開発された「JAPAN e-Portfolio」（運営・管理：一般社団法人教育情報管理機構、運営サポート：株式会社ベネッセコーポレーション）が2020年度、一部の大学入学者選抜において活用されている。高大接続の促進を見据え、「高校生活における学校の授業や行事、部活動、取得した資格・検定や学校以外での活動成果を記録し、今後の学び・成果につなげていくためのふりかえりと、蓄積した『学びのデータ』」が大学に提供されるようになった^{※5)}。おそらく今後は、大学教育の「入口」部分だけでなく、「出口」部分にも学修ポートフォリオを活用する動きが活発になることが予測される。すでに自ら作成した書面によるポートフォリオを持参して行われる就職活動等が、多くの場面で実践されている。あるいは、「教職履修カルテ」をこのような文脈の中に位置づけることもできるだろう。

このように、3ポリシーに対応する形で、高等教育のあらゆる段階で活用されるような、いわば「フルスペックの学修ポートフォリオ」システムの確立を目指す場合、各部署の緊密な連携はもちろん、情報の管理等についてどの部署が責任を負うのかなど、大学全体で詳細かつ厳密に検討する必要が生じる。

③さまざまなレベルでの双方向性を確立すること

学生における学修ポートフォリオと対となる存在として、教職員におけるティーチング・ポートフォリオの存在がある。学修ポートフォリオの充実度合い、情報の豊かさは、教職員の教育活動の評価の精度に比例すると考えられる。あるいは、学修ポートフォリオの情報を共有することでチューターと授業担当の教員の連携が促進されたり、保護者との連携が促進されたり…といった形で、学修ポートフォリオの情報を活用することで、さまざまな部署や学生の学びの支え手との間で、双方向性の確立が促進されることが予想される。

この点についても先述したとおり、情報のアクセス権限や、「広がり＝範囲」及び「時間の流れ＝入口～出口」のどこまでをカバーするのか等について、全学的な検討が求められるところである。

4. 最 後 に

ごくごく簡潔に、本学における「マイステップ」=学修ポートフォリオの現状と今後の見通しについて示した。本学はこれまで教育の質保証のためのさまざまな試みを実践しており、また、個々の教員の「データに残らない」取り組みも多く実践され、評価も得てきている。しかしそれらを拾いきれず、あるいは、総合的に取り扱うことができない面もあり、そのことが教育活動において、若干の不都合を生じさせている面もある。

「唯一の特効薬」という訳ではないが、学修ポートフォリオの充実を軸にすることで、その解決の方途を見出すことができるのではないかと考える。本資料が、その意欲を高める上での一助となれば幸いである。

【註】

- ※ 1 中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」(2008) https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf 2020年2月13日閲覧。なお、この答申の段階では学“習”ポートフォリオという表現となっている。
- ※ 2 公益社団法人 私立大学情報教育協会 大学情報システム研究委員会「学修ポートフォリオシステムの導入・活用等の参考指針」(2017) <http://www.juce.jp/info-system/port.pdf> 2020年2月13日閲覧。
- ※ 3 前掲資料。
- ※ 4 三宅元子・白井靖敏「学修ポートフォリオの導入と検証」, 『名古屋女子大学紀要』(63), p. 89-100, 2017.
- ※ 5 「JAPAN e-Portfolio」HP内「『JAPAN e-Portfolio』とは」 <https://jep.jp/EPortfolio/statics/about.html> 2020年2月13日閲覧。

【参考文献】

- ・安達一寿・松永修一「本学 e ポートフォリオ活用に関するモデルの検討」『十文字学園女子大学紀要』(47), p. 223-232, 2017.
- ・中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」, 2008.
- ・中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」, 2012.
- ・岩崎公弥子・大橋 陽「学びのプロセスに基づく e ポートフォリオの設計と課題」, 『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』(18), p. 15-31, 2014.
- ・三宅元子・白井靖敏「学修ポートフォリオの導入と検証」, 『名古屋女子大学紀要』(63), p. 89-100, 2017.
- ・三宅元子・白井靖敏・安井 健「学修ポートフォリオ二年目の比較検討」, 『名古屋女子大学紀要』(64), p. 409-417, 2018.
- ・公益社団法人 私立大学情報教育協会 大学情報システム研究委員会, 「学修ポートフォリオシステムの導入・活用等の参考指針」, 2017.

—2020年1月24日 受理—